

中瀬有紀

## 助け合う希望



ホープ・サラス氏制作・出演の『希望』ダウントウン・ニューヨークの劇場ワイルド・プロジェクトにて  
(©Pascal Perich, Erika Latta, Yuki Nakase)

照明デザインを担当した『希望』の初日を迎えた後、私はしばらくぶりに家に帰りましたが、役者さんの「役抜き」ないし「プロダクション抜き」に数日かかりました。『希望』はホープ・サラス氏が2007年に他界した彼女の母親をモチーフに制作・出演した演劇です。彼女自身と彼女の両親、そして母親の親友を含む4役以上を1人で演じきったサラス氏ですが、性的虐待を受けた彼女の母親の生い立ちから、聞くに堪えない彼女の流産そして破綻した結婚生活と自殺した元夫など、語られる内容が非常に濃厚で、どこまでがフィクションなのか本人に聞くことすら躊躇します。唯一確かなのはサラス氏が心から両親、特に母親を愛していることでしょう。自分の娘に「ホープ(希望)」と名づけた母親の死から11年経ったこの秋、『希望』はサラス氏にとって喪に服す最終章として制作されたのかもしれません。

この作品が私にとって特別なものとなったもう1つの要因は、演出家のエリカ・ラタ氏との出会いです。欧州と北米を股にかけて活躍する彼女は、以前来日し劇団SCOTにて鈴木忠志氏に師事した役者です。日本で鈴木氏から学んだことを常に作品に活かし、舞台稽古中には片言の日本語で「がんばってください」と場を和ませる彼女は、役割分担が明確なアメリカの舞台業界では珍しく「みんなで一緒に創る舞台芸術」を目指しているように見受けられます。舞台美術の打ち合わせにはスケッチを持ち込み、照明のキューや明かりの移り変わりまで細かく指定する彼女は、舞台制作者は劇場にあるすべての要素を理解すべきだと話していました。電気が怖いから照明器材の取り扱いには誰かにやってほしいということだけが、照明家を雇う理由のようです。鈴木氏

から何を学んだのか公言はしないものの、暇があればせつせと客席の掃除をする彼女を見ていて、なんとなく劇団SCOTでの経験が今の彼女を形成しているように感じました。

確かに、すべてが順調だったとは言い切れません。改定スケジュールが全員に行き渡らずに混乱したり、約束したはずの人数の作業員が予算の関係で用意されていなかったり、前もって知らされていればプランの再考等に対応可能であることも、現場に入ってから暴露されては遅すぎることはばかりで悩まされました。しかし、そのような組織構成だったからこそ、私が『希望』の経験から学んだことは、人とのつながりの大切さです。いつも誰からの力も借りずに、誰の迷惑にもならないよう、一人で頑張るんだと強がっていましたが、『希望』では誰かに頼らないと達成できないことばかりでした。ラタ氏が求める演出に必要な照明器材の調達が与えられた時間と予算内には不可能だとわかったとき、「倉庫で眠っている器材なら使っていいよ」と手を差し伸べてくれたのは、いつもお世話になっている照明会社です。また、プレビュー初日当日にクラッシュして操作不能になった小屋の照明卓ETCエレメントの代わりが週末だったためになかなか見つからなかったとき、スタッフの友人がたまたまETCのノマド・バックとドングルを個人的に所有し、その日の公演の照明キューは不都合なくノートパソコンから再生されました。母親をなくして夫も子どももないけれど「健康な身体と素晴らしい友人に恵まれている」と言うサラス氏が『希望』というタイトルにこめた想い、それを私自身が体験することになったように思います。